【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和6年度学校評価 結果

達成度（評価）
A：十分達成できている
B：おおむね達成できている
C：やや不十分である
D：不十分である

学校名	佐賀市立成章中学校
1 前年度 評価結果の概要	・生徒アンケート、保護者アンケート共に本校の教育活動に対する評価は好意的であった。また、全職員で協働的な学びに取り組むことを通して、魅力ある学校づくりに取り組むことができた ・不登校生徒数の減少が課題。今年度も、引き続き不登校対策に力を入れて取り組む。 ・「特別支援教育の充実」、「オンライン英会話の充実」について、取り組みの柱を明確にして、今後の教育活動の指標を立てるようにしていく。
2 学校教育目標	心豊かに　自他を高め　章（あや）を成す ・成章の心（世の中を明るく照らす明るい心で、弱いものを助け自らのプライドを高める正しい心で物事を判断・行動し、誠心誠意の姿に感動する美しい心）で自らの良さを伸ばすとともに他人の良さを尊重する。それぞれの良さを織りなし、美しく物事を成し遂げることで、絆感（居場所のある安心感、仲間への信頼感と思いやり、多様な考えを尊重する人権感覚で結ばれた感覚）や3観点の学力を獲得する。
3 本年度の重点目標	（1）【不登校対策】生徒一人一人に絆感を育み、不登校の生徒を減らすようにする。 （2）【学力向上】全国学力テストや佐賀県学習状況調査等で、平均等を超えるように学力向上を果たす。

4 重点取組内容・成果指標　中間評価　5 最終評価

（1）共通評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	取組内容	成果指標（数値目標）		進捗度（評価）	進捗状況と見通し	達成度（評価）	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	○「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた授業に取り組む。	○①生徒の2割以上が、授業について自分の課題を解決するために皆と協働して取り組む授業であると評価する授業が8割程度ある。（生徒による授業アンケート） ②県や国などの学習状況調査を比較として、自校の平均が伸びていたり上回ったりしていることを指標とする。	・全部の普通学級の授業で、「協働的な学び」の授業をもとにした授業チェックリストを用いて，授業実践し、評価する。	A	・個別最適化と協働的な学びの実現を目指し、授業の中でICT機器の活用や、生徒が協働する学びを進められるよう呼びかけを行っている。また、教育センターから講師を招聘し、県調査の結果を踏まえた研修を校内研修を実施した。 ・全国調査（3年生）や、県調査（2年生）において、それぞれに全国・県の正答率を上回っていた。次回の全国・県調査に向けて日々の授業実践に取り組んでいる。	A	・アンケート結果によると、生徒の9割以上が「協働的な学び」を意識して授業に取り組むことができた。また、教師の9割以上が「個別最適な学び」と「協働的な学び」を意識した授業を実施することができた。 ・授業でのICT機器活用については、全職員で情報共有し工夫改善することで、更に効果的なICT機器の活用につながる。	A	・生徒の9割以上が協働的な学びを意識して取り組んでいる。また、教師の9割以上が個別最適な学びと協働的な学びを意識した授業を実施できている。 ・ICTの活用については、外部の専門職（佐賀大学やNTT等）のアドバイスも受けてもいいのではないかと思う。	・学力向上対策コーディネーター ・研究主任
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	①学校評価等で共同体感（絆感）を意識して生活した生徒8割以上 ②自己肯定感、自己有用感について、1年を通して高まるように指導する。	・生徒指導の4機能を意識した多様な教育活動を通して、生徒が様々な課題に挑戦し、多様な他者と協働することのよさを実感させる。	A	・生徒指導の4機能や発達支持的な生徒指導の考えのもと教育活動に取り組むことができた。 ・体育大会や修学旅行などの学校行事において、実行委員など、生徒の出番や役割を意識して、多くの場面で活躍させることができた。	A	・「学びあいなどの「協働的な学び」を意識して授業に取り組みましたか」について肯定的な回答をした生徒は93%、「生徒同士の人間関係はいいですか」は96%、「先生と生徒の人間関係はいいですか」は94%となっており、目標の80%を大きく超え、学校全体で共同体感（絆感）をもって生活することができた。 ・「学校は楽しいですか」について肯定的な回答をした生徒は93%になっており、学校生活を通して自己肯定感が高まっている。しかし、否定的な回答をした生徒も7%おり、次年度も引き続き、丁寧な指導を続けていく必要がある。	A	・生徒同士の人間関係は96%、先生と生徒の人間関係は94%が良いと答えており、目標を大きく超えている。学校全体で協力的な生活ができてる。 ・生徒の出番や役割を意識させ活躍させる事ができたことは大きな成果である。心の教育を軸として継続してほしい。 ・学校が楽しいと感じられるのが何よりだと思う。	・学級担任 ・学年担当者 ・教育相談担当 ・生徒指導主事
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実 そのために、そ・し・き・人対応の実践 そ：早期把握 し：初期全力対応 き：記録対応 人：人権意識高く、多様性を認め組織で対応	○いじめの重大事案と発展してしまうケースをゼロにする。	・①相手の立場への共感に基づく、一人一人の多様性を認め、人に上下はない考え方を日々の実践を通して生徒に手を変え品お変えて伝える。人は、立場によって同等ではないが、立場を超えた時、人としては対等 ②いじめ情報のアンテナを鋭敏にし、そしき人対応を実践 ③いじめ防止対策委員会年間2回以上	A	・毎月初めのいじめアンケートの実施や6月の教育相談週間の設定など、いじめの早期発見、初期全力対応を常に意識して、教育活動に取り組んでいる。また、生徒指導委員会や教育相談部会を毎週開き、学年だけでなく学校全体で情報共有を行い、組織的な対応ができた。7月にいじめ防止対策委員会を開催し、現状の把握と、これからの取り組みについて確認することができた。	A	・毎月初めのいじめアンケートの実施を行うことができた。生徒のアンケートの記入から早期に対応することができ、効果的に指導に生かすことができた。次年度も続けていきたい。 ・生徒朝会では生徒会主催で、いじめゼロ宣言を全校生徒で読み上げ、生徒の人権意識を高めることができた。 ・2月に2回目のいじめ防止対策委員会を開催し、現状の把握と、これからの取り組みについて情報共有と来年度に向けて準備を進めた。	A	・アンケート結果を受けて、特に心配な状態ではないと感じた。 ・毎月のアンケートにより、早期に対応でき効果的に指導ができている。また、生徒会主催で、いじめゼロ宣言で人権意識を高めることができている。 ・今後も、細かい問題を見つけて指導するのは大変でしょうが、大人の目はごまかされないことを伝えてほしい。	・学級担任 ・学年担当者 ・学年主任 ・教育相談担当 ・生徒指導主事
	●◎児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。 一人の個を生かすのは、周りの仲間が作る環境であるという観点から、個別支援だけでなく、集団の環境づくりのための指導を重視して取り組む。	○QUで要支援群減少、満足群増加学級90%。自殺念慮等、要支援群への手立て実施100% ●◎「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒80%以上 ●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上	①生徒指導の4機能を、日々の教育実践で意識して指導に当たる。 ②発達支持的生徒指導・課題予防的生徒指導（課題未然防止教育）生徒指導として常に「出番→役割→承認」のサイクルを意識し学校行事や生徒会活動などを行う。	A	・WebQUを実施することができた。結果を踏まえて効果的な指導になるようにしていきたい。 ・生徒指導の4機能を意識し、生徒会役員にも出番・役割・承認を意識して活動させることで生徒の有用感の獲得に役立った。生徒会主催のボランティア活動が雨天のため開催できなかったので，今後一層生徒の主体性を引きだし、活動させたい。	A	・「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした生徒は70%にとどまっており、自己理解を深め、自分の将来ややりたいことに自信を持てるような指導を続けていきたい。 ・「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した生徒は91%となっていた。発達支持的生徒指導を意識して指導したことにより、生徒が自分のよいところに自信を持ち、満足群が増え、目標を大きく超えることができた。	A	・発達支持的生徒指導を意識したことで、生徒が自分の良いところに自信がもてたことはすごいと思う。 ・生徒が先生に良いところを認めてもらっていると感じているというのはすごくいいことだと思った。一方、先生が生徒の良いところを認めてくれていると思わない生徒が数%いる。そういう生徒の声を聴いてほしい。	・学級担任 ・学年担当者 ・学年主任 ・教科担任 ・各行事担当者 ・教相談担当 ・生徒指導主事
	○5月連休明け、9月、1月などの孤立感による不登校が増加しやすい時期の前に、生徒指導部の連携・協働によって、手立てを計画的に講じ、実践する。 観察→方向づけ→実践→評価	①中学校人って不登校になる割合を、多い学年で1%未満に抑える。 ②不登校の生徒でも、学校の誰かと絆があると感じている生徒の割合を知り、次年度からの向上目的とする指標とする。	・生徒指導部からの「成章の心」、教育相談部からのたより、等の各種便りを通じてや、集会や個別の連絡を通じて、集団として、絆感を高めたり、多様性を尊重したりする意欲を高めるとともに、個が集団の中で自己存在感を高められるようにメッセージを送る。	A	・教育相談からの連絡を通して、カウンセリングや「7時のつどい」など、関係機関につなぐようにした結果、保護者の思いを聞くことができ、対応が円滑になった。 ・教育相談後、早期に対応することで、不登校を未然に防ぐことができた。 ・生徒指導部や養護教諭との連携を密に行い、生徒の情報共有をすることができた。	A	・年間を通じて、教育相談便りやカウンセリング、「7時のつどい」の参加、関係機関につなぐなど相談機関を広げた。その結果、保護者や生徒の思いを知ることができ、安心して学校生活を送ることができたケースが増えた。また、保護者アンケートによると、楽しく学校生活を送ることができているという回答が多い。不登校を未然に防いだり減らしたりする方法を今後も考えて、職員と情報共有をしながら実践していきたい。	A	・教育相談後、早期対応することができ、不登校を未然に防ぐことができた。保護者のアンケートで、楽しく学校生活が送ることができているとの回答が多い。 ・学校が楽しいところ、安心できるところと生徒が感じたら不登校は減ると思います。ATMな笑顔で生徒と接するのが、学校でも家庭でも大事と思う（ATM＝明るく、楽しく前向きに）。 ・業務が多い中、個別対応等よくしてもらっている。	・学級担任 ・学年担当者 ・教育相談担当 ・生徒指導主事
●健康・体つくり	●「安全に関する資質・能力の育成」	●「朝、自分で起きている」と回答する生徒70%以上 ●「健康に良い食事をしている」児童生徒80%以上 ●生徒の交通事故を0（ゼロ）にする	・小中連携組織の家庭の学び部会での推進や保護者への啓発（保健だより・食育だより）を行う。 ・登下校時の交通指導を年間を通して行う。 ・生徒会を中心とした啓発活動の推進	A	・生徒会本部や各種委員会で生徒自らアンケートやプレゼンテーションを行うことで、生徒の意識向上を図った。 ・毎日登下校時の交通指導を行っている。 ・自転車通学においての事故や違反等についてはその都度、迅速に対応・指導し記録に残すことを徹底した。また、全校放送、注意喚起を行い、アンケートを実施した。今後も、継続して交通安全の啓発を進めていく。	A	・「朝、自分で起きている」と回答する生徒は、85%以上。 ・「健康に良い食事をしている」生徒90%以上。 ・昨年度からの取り組みである、小中連携の家庭連携部会で、強化週間を設け、「家庭学習・生活がんばり表」の取り組みを行い、家庭と連携し、基本的な生活習慣の確立を目指した。 ・生徒の大きな交通事故はゼロであった。	A	・起床、食事は本来家庭教育であるのに、家庭と連携して基本的な生活習慣の確立に取り組まれている。 ・「健康的にいい食事をしている」が90%以上は素晴らしい。「家庭学習・生活がんばり表」の取組を行って基本的な生活習慣の確立ができている。 ・下校時にも信号機付近に立たれている先生を見かけたことがあり、生徒の交通意識の向上を高めていると感じた。 ・大きな事故がなくなによりだった。	・養護教諭 ・交通安全担当 ・生徒会担当
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。生徒指導事案があっても年間720時間以内の超過勤務時間実践100%	・定時退勤日の設定（水曜日） ・学校閉庁日の設定 ・部活動ガイドラインの遵守、部活動休養日の設定	B	・定時退勤日を設定しているが、全員が定時に退勤はできていない。 ・学校閉庁日の徹底はできた。 ・部活動休養日の設定は、ほぼできている。しかし、部活動時間の見直しが必要である。	B	・定時退勤日を設定しているが、全員が定時に退勤はできていない。 ・学校閉庁日の徹底はできた。 ・部活動休養日の設定は、ほぼできている。	B	・業務効率化と時間外勤務時間削減は、本人が強い意識を常にもち取り組まなければ改善は難しい。 ・定時退勤の設定は、生徒の対応で難しいと思う。 ・今や民間では定時退社しない社員はほとんどいない。意識を変えることが必要 ・先生同士のコミュニケーションが気楽にゆとりをもってとれるようになると、また違う効果がでるのかなと思う。 ・部活動休養日はほぼできている。生徒の学習意欲が増すと良いのだが。	・管理職 ・部活動担当
	○勤務時間を意識した働き方を浸透させる。ワークアンドライフバランスを実現するために、教職員が自己管理の中のタイムマネジメントに関わる資質・能力を向上させる。	○教育者として、健康で、かつ、充実した1年だったと答える職員90%以上。 ○ライフステージをカバーし合う雰囲気が職場にあると学年主任と管理職全員が思う。	・衛生・健康管理委員会を年3回以上実施 ①毎月のゼロの日の取り組み　不祥事ゼロ ②ライフステージをカバーし合う雰囲気があると答える職員90%以上できたら100%を折に触れて、管理職が職員に伝える。 ③コロナ禍明けで、コロナ禍以前に戻すのではなく、コロナ禍の知恵も生かした新しい学校行事等の工夫	B	・毎月教頭だよりを通して、時間外勤務のことや健康管理のことなど呼びかけを行った。 ・コロナの影響もあるが、昨年度と比較して時間外勤務時間が少し増えている。4月から9月までの平均残業時間は34時間であった。 ・急な休みや校務分掌に関して、学年を中心にカバーしたり協力したりすることができた。	B	・不祥事ゼロを100%の教師が、意識して生活できていた。 ・時間外勤務の短縮について、80%の職員ができたと答えた。また、時間外勤務の年間平均が、35時間をやや超えた値で、目標まであと一歩だった。 ・他の先生のカバーやフォローをすることができた教員が83%であった。	B	・時間外勤務時間が多い職員には、粘り強い指導を行い本人の意識を変えなければならない。他の先生のカバーやフォローは評価できる。 ・働き方改革を頑張ることが難しいのは、生徒たちが生身の人間である以上、時間で解決できる問題ではない。大変な取り組みだ。 ・残業の内容やそのときの心の有り様等、改善しなければいけないところから少しでも負担を減らしていけたらと思う。	・管理職 ・教務主任 ・養護教諭 ・各行事担当教員
●特別支援教育の充実	○合理的配慮を必要とする生徒に対して、本来受けうるべき利益を受けられるよう手立てを講じる。 ○個別の教育支援計画から、自立活動を生徒に関わる全ての職員が共有し、協働した教育活動を展開する。	①QUテスト11月調査で各学級学級生活満足群60%以上OR　6月時のQUより向上 ②合理的配慮を必要とする生徒を把握している先生の割合100%	・生徒指導3の取り組みを基本として ①コグトレ　境界域の能力について自他ともに理解を深め支え合う。 ②ワンクッション指導　自分の言いたいことを言う前に、相手の気持ちを聞く。 ③個々の生徒が自己開示できる集団作り ④弱点もリフレーミングで長所に　個の弱点を、強みとする集団の育成	A	・特別支援学級に対する理解を深めている教職員は100%であった。 ・特別支援学級担任と交流学級担任、特別支援学級支援員で密に情報共有を図り、生徒への細やかな支援に繋げることができた。 ・生徒が困り感を抱えたときは、保護者に連絡、相談し、その後の指導、支援に繋げることができた。 ・2か月に1度部会を開催し、自立活動について研修や意見交換を行った。	A	・特別支援学級担任と交流学級担任、特別支援学級支援員で密に情報共有を図り、生徒への細やかな支援に繋げることができた。 ・生徒が困り感を抱えたときは、保護者に連絡、相談し、その後の指導、支援に生かすことができた。 ・QUテスト2月調査で学校生活満足群が、10月時の結果より向上した。 ・合理的配慮を必要とする生徒を把握している先生の割合は100%であった。	A	・教職員同士が密に情報共有を図り、生徒への細やかな支援に繋げ困り感を抱えたときは、保護者に連絡、相談し、指導支援に生かしている。 ・特別支援学級担任と交流学級担任、特別支援学級支援員で密に情報共有を図ることは大変だと思う。生徒一人一人の細やかな指導を期待している。 ・全ての職員が支援計画から自立活動を把握されていることは素晴らしい。 ・一人一人に個別の対応が必要でありとても大変だが、これから益々支援が拡大されなければならない。	・学級担任 ・学年担当者 ・学年主任 ・教科担任 ・各行事担当者 ・教相談担当 ・生徒指導主事

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標（数値目標）		進捗度（評価）	進捗状況と見通し	達成度（評価）	実施結果	評価	意見や提言	
○総合的な学習の充実	○総合的な学習時間における新たな取り組みにおいて、教師の学習コーディネーターとしての資質を磨く。 ○オンライン英会話やイングリッシュデイを通した、表現力の向上。	○新たな（英語によるコミュニケーション活動）総合的な学習時間は、主体的に学べたと答える生徒が8割以上。 ○発表力やプレゼンテーションにおける表現力が向上した生tが8割以上。	・教科等横断的な視点で、郷土や地域に関する各教科等の授業を実践する。 ・横断的・総合的な学習や探究的な学習において、探究の過程で思考力、判断力、表現力等が深まるようにする。	A	・佐賀市に関して、興味・関心の高いテーマを個人や班で選び、調べ学習を行い、、英語での発表会に向けて準備を進めている。ICT機器を用いて調べたり、佐賀市について講話や資料館見学を行ったりして学習を深めている。今後は、英語での表現力向上に力を入れた指導を行う。	A	・各学年、佐賀市に関して情報収集をし、英語でまとめ、外国人に対して佐賀の魅力を紹介することができた。アンケート結果では、9割の生徒が、佐賀についての学びを深め、英語で発信することができたと答えた。 ・総合的な学習の時間と各教科をつなげた教科等横断的な学習にも取り組むことができた。	A	・各学年、佐賀市（地元学）の情報を収集し、学びを深め英語で外国人に対して佐賀の魅力を9割の生徒が紹介できている。 ・情報収集しそれを英語でどう表現するか、大変良い取り組みだと思う。英語で表現するにはまずは日本語で理解しなければいけない。発表の場を広げてはどうか。 ・特定の教科だけではなく、すべての教科で同じテーマの学習に取り組むというのは興味深く感じた。	・学力向上対策コーディネーター ・研究主任

●・・・県共通　○・・・学校独自　◎・・・志を高める教育

5 総合評価・次年度への展望	・生徒アンケート、保護者アンケート共に本校の教育活動に対する評価は、どの項目も良い結果であった。また、全職員で協働的な学びに取り組むことを通して、魅力ある学校づくりに取り組むことができた。 ・全国学力・学習状況調査では、全国平均以上の結果を収めることができた。 ・不登校生徒数の減少が課題。新たな不登校を生まないことをめざし、次年度も引き続き不登校対策に力を入れて取り組みたい。 ・ICTの効果的な活用を意識した取り組みを充実し、教育活動の改善をしていく必要がある。